

## 中島広足と書肆立身屋万兵衛

吉 良 史 明

はじめに

近世後期の国学者中島広足なかしまひろたり（寛政四年（一七九二）生、文久四年（一八六四）没）の文事に関する研究は、彌富破摩雄の一連の論攷に端を発する。彌富は、横山重とともに『中島広足全集』（大岡山書店、昭和八年）を編み、また広足の伝記を『中島広足』（厚生閣、昭和十九年）に取り纏め、広足研究の第一人者として戦前に知られた人物である。その彌富の数ある論攷中において、以後の研究に多大な影響を与えたと思しき一本が「広足の歌文に現れたる異国事項」<sup>①</sup>である。

以上見た通り、彼れは最も新しき天文、地理より西洋の文物人情に関する知識を有しては居つたが、併し未だ断片的で、整頓した知識ではなかつた。即ち未だ組織的新思想とはならなかつた。

中島広足と書肆立身屋万兵衛

つた。とはいへ断片的であるが、それ等が或時は歌の材料となり、或時は文の比較物件となりて、当時一般の国学者等の思想よりは、遙かに進化した泰西思想であつた事は、認めぬ訳には行かぬ<sup>②</sup>。

末尾の一節である。異国の文物を題材とした広足歌文が組上に載せられ、西洋近代思想に対する広足の造詣の深さが結論として述べられている。右と同様の論は、同「海洋文学者としての中島広足」<sup>③</sup>においても「当時海外の事物、事情に関して、比較的多くの知識を有して、それを自己の文学の材料に使用した国文学者としては、彼は実に当代の第一人者であつたとするを憚らない」と展開されており、海外の事物を自らの文芸の糧とした点に広足文事の特質が見出され、再三にわたり力説されていたといえよう。

かくて、学界に紹介された広足の文芸は、彌富以後の研究におい

ても異国情緒漂う作品が主として論じられてきた。例えば、佐々木信綱『近世和歌史』（博文館、大正十二年）は「また観清人戯場作歌、詠食火鳥歌、観虎作歌などもある。ことに広足が文政六年九月国風に訳した阿蘭陀の詩は、西詩を訳した初めともいふべきものである」と記し、舶来動物等を題とした広足和歌、また近代翻訳詩の先駆けとも称すべき広足長歌の存在を指摘している。佐々木は、近世和歌から近代短歌への流れを踏まえて、近代短歌の先駆けとして広足和歌を和歌史上に位置づけたといえよう。また、近時刊行の田中仁『江戸の長歌——『万葉集』の享受と創造——』（森話社、平成二十四年）は、近世長歌史上における歌の題の拡がりを示す格好の例として、広足知友の青木永章と広足の長歌を取り上げている。他の近世歌人の長歌と比較しつつ広足長歌を論じている点、示唆を得るところが大きいものの、結論とするところは、彌富・佐々木と同一である。つまり、いずれの論攷も通時的な見地から和歌史を構築しているといえよう。

一方、長崎歌壇およびその周辺の人物の文芸と動向を踏まえて、何故異国情緒漂う広足和歌が近世後期の長崎において詠まれたか、その内実を明らかにする視点が従来の論攷には欠落しているといわざるを得ない。広足を座標軸に据えて近世後期長崎の文壇を共時的に検証する試みがなされるべきであろう。以上の問題意識のもと、

本稿においては従来その実体が掴めないままであった書肆立身屋万兵衛に焦点を絞り、広足著述版行に向けた立身屋の一連の動きを考察し、異国の文物を題材とした広足歌文との関連を検討する。

#### 一 天保年間における広足著述の版行と立身屋

文政五年（一八二二）に初めて長崎の地を訪れて以後、広足は同地において数多くの歌を詠み、和文を記した。その日々の詠草および文稿を取り纏めて編んだ家集が広足『檀園集』（天保十年序刊三卷三冊）、同『檀園長歌集』（天保十年序刊一冊）、同『檀園文集』（天保十年序刊二卷二冊）である。三書は、公刊された広足著述中において、異国の文物を和歌ならびに和文の題とした初期の作品に位置づけられる。その三書を始めとして、天保年間の広足著述の版行に携わった書肆が長崎の十千堂こと立身屋万兵衛である。

立身屋に関しては、近世地方出版史研究の観点から、広足著述の版行書林として中野三敏「近世九州の出版文化」<sup>④</sup>に特筆されるものの、書肆としての営みの実体は、依然として不明な点が多い。例えば、奥付に大坂の群玉堂河内屋茂兵衛の名が立身屋とともに列記されていることに基づき、大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』（大阪府立中之島図書館、昭和五十——平成五年）を繕いても、河内屋による広足著述の開板願書、さらに立身屋の名もまた見出し

得ない。また、井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店、平成十年）においても、版行書目二点が「不知火考（中島広足）天保6序／常磐集（山内繁樹）嘉永6合」と記されるのみである。

そもそも、立身屋が実在した書肆であるか否か、疑念を抱かせる点が多々ある。まず偽名とも取り得る「立身屋万兵衛」の称、さらに「万兵衛」を振ったであろう「十千堂」なる屋号に関して。戯れに付けたと思しきその名から判断して、広足もしくははいずれかの人物が架空の書肆を装った可能性が浮かび上がる。また、広足初期著述の初版本の奥付には立身屋の所在が「長崎東中町」と明記されているが、修訂本においては町名の「東中町」のみが埋木されて削られている点も、不審である。⑤長らく立身屋の実像に迫り得ないままであったことも右の状況からして致し方あるまい。

ところが、近時の広足研究の目覚ましい進展を受けて、立身屋の書肆としての足跡を辿り得る新資料が岡中正行『中島広足の研究』（私家版、平成二十三年）上巻で紹介された。現在鎮西大社諏訪神社に伝わる広足『片糸』（嘉永六年奥付 刊本一冊）は、広足手沢書入れ本であり、巻末附載の「檀園大人著述目録」上欄には広足著述の蔵版者の情報（図版I参照）が朱筆にて書き入れられている。天保期の著述に関しては、天保六年頃の刊行と推定される『不知火

図版I 諏訪神社蔵『片糸』巻末附載「檀園大人著述目録」

<p>嘉永永六 癸 丑二月</p> <p>書林</p> <p>京 城 戸 市 右 五 門 江 戸 大 英 大 助 大 坂 田 中 及 空 門 肥 後 熊 野 珠 敷 屋 傳 兵 衛 日 豊 前 屋 太 左 衛 門 長 崎 小 野 左 右 助</p>		<p>檀園大人著述目録</p> <p>不知火考 一冊</p> <p>檀園家集補註 二冊</p> <p>瓊浦集 二冊</p> <p>檀園長歌集 一冊</p> <p>樺島浪風記 一冊</p> <p>志能歳多代 一冊</p> <p>敏 一冊</p>	<p>佐烏志能考 一冊</p> <p>水江物語 一冊</p> <p>檀園歌集 三冊</p> <p>檀園文集 二冊</p> <p>かゝの文上葉 三冊</p> <p>海人のくちろ 一冊</p> <p>汗 一冊</p> <p>檀園隨筆 二冊</p> <p>詞八衢補遺 二冊</p> <p>窓乃小條 二冊</p>
--	--	---	--

考』（天保六年序刊 一冊）、『佐鳥廢志之考』（天保六年序刊 一

冊）、『檜垣姫家集補註』（天保六年跋刊 二卷二冊）の三書が●印

の立身屋版、天保初め頃の出刊と思しき『水江物語』（天保二年序

刊 二卷一冊）が○印の江戸版、長崎歌人の和歌を主として収録し

た広足編の類題集『瓊浦集』（天保十一年凡例刊 二卷二冊）が△

印の社中蔵版であることが見て取れる。また、続く「檀園歌集」こ

と『檀園集』右上の▲印「村上会連板」が示すところはいま一つ判

然としないものの、村上会なる組織の関与をうかがわせる。そして、

天保十年以降に上梓された『檀園長歌集』『檀園文集』『樺島浪風

記』（天保十一年刊 二卷一冊）、『かしのくち葉』（天保十四年刊

三卷三冊）の四書には「自板」の印である○が付けられており、広

足入金本であることが知られる。以上の著述は、江戸版の『水江物

語』を除き、奥付に立身屋の名が刻まれており、天保期の広足著述

の版行には立身屋が関与していたことを物語る。広足自らの手にな

る書入れに「立身屋板」と「自板」が区別されて示されている点に

鑑みて、広足が架空の書肆立身屋を装った可能性はないとみてよい。

## 二 長崎版画の版元と立身屋

さらに、京都糸割符商人巨智部忠陽の諸用書留帳である『日録』

（長崎歴史文化博物館蔵 天保十一年筆録 自筆本一冊）は、立身

屋に関するより詳しい情報を記録している。

勝山町

立見や万兵衛

一唐本五冊

但 チツ入 六冊 全

只 三

（下略）

諸氏との金品の授受を書き留めた一節である。広足著述初版本の刊記に記された東中町と異なり、天保十一年（一八四〇）の時点において立身屋が長崎の勝山町に居を構えていたことを示している。

近世後期の勝山町は、長崎版画の版元が軒を列ねた町である。今見屋・富島屋・豊島屋を始めとする著名な店が立ち並んでおり、その一画に立身屋もまた店舗を構えていたこととなる。一枚摺と冊子本の違いこそあるとはいえ、版元であることに変わりはなく、立身屋と長崎版画の版元との間に何がしかの繋がりがあることも想定されよう。

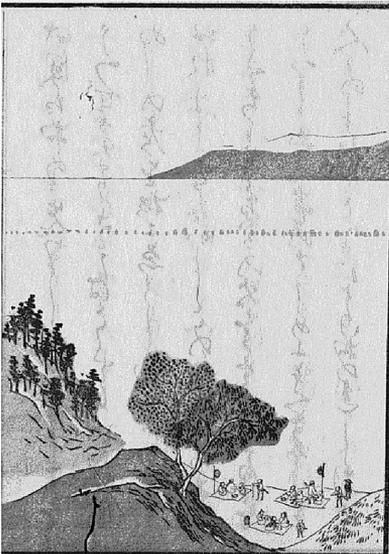
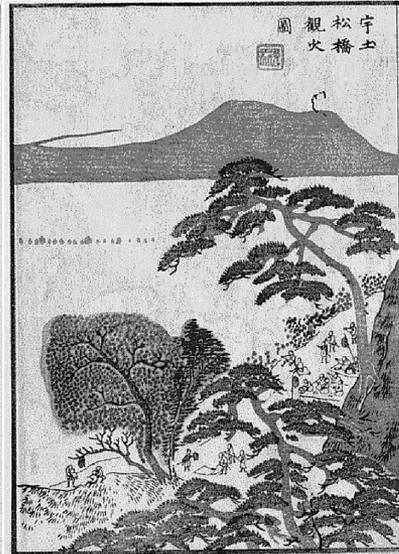
そして、現に長崎版画の版元が広足著述の版行に携わっていた可能性を示す資料が『不知火考』所載の図版Ⅱ「八代天草二郡海陸地理之図」ならびに図版Ⅲ「宇土松橋観火図」である。長崎南画三筆の一人木下逸雲が不知火をじかに観て描いた両図に関して特筆すべきは、色摺りであること、さらにその摺りの出来栄であろう。近

図版Ⅱ 国会図書館蔵『不知火考』所載「八代天草二郡海陸地理之図」



中島広足と書肆立身屋万兵衛

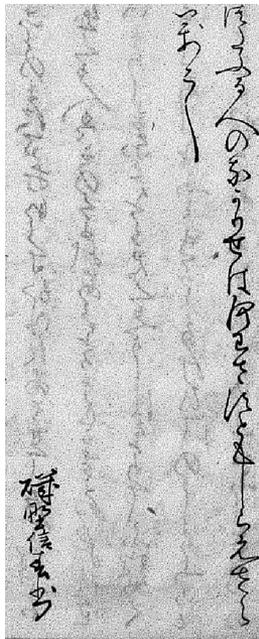
図版Ⅲ 国会図書館蔵『不知火考』所載「宇土松橋観火図」



世中期から後期にかけて田舎版と呼ばれる地方の出版が諸国に拡がりをみせていく模様に関しては、先述の中野を始めとする諸先学の詳細な解説が備わり、三都版と比べた時の彫り・摺りの粗さが田舎版の特徴として指摘されている。しかしながら、いま組上に載せる『不知火考』は、さき論じた通り立身屋版であり、長崎の地において摺られた田舎版であることに間違いのないものの、本文ならびに色摺りの挿絵ともに墨の斑・擦れ等もなく摺り上げられている。つまり、文字彫り・絵彫り・摺り・墨の調合等に長けた熟練の彫り師・摺り師が『不知火考』の版行に携わっていた事実を彷彿とさせる。先述の通り、立身屋が長崎版画の版元と同じ界隈に店を構えていた事実を鑑みて、長崎版画の版元および職人の存在が『不知火考』成立の背後にはあるとみてよからう。長崎図を始めとして、近世初期の黄檗僧の漢詩にも詠まれた長崎八景図、オランダ人ならびに清人の姿を描いた異国人物図、オランダ船が長崎の港に入る模様を描写した蘭船入港図等、多様な題材を彩色の一枚摺りに仕立てて版行してきた長崎版画の職人の技が『不知火考』の両図には垣間見える。

さらに、長崎版画版元の関与の跡を残す資料がいま一つ伝存する。磯野信春編『長崎土産』（弘化四年刊 一冊）所載の中島田翁詠「観清人戯場作歌」である。信春は長崎版画の版元大和屋を営み、

自らも絵筆を執り数多くの浮世絵を手掛けた人物。その信春が編んだ地誌『長崎土産』に田翁こと広足の長歌が収録されており、その末尾には図版Ⅳのごとく「磯野信春書」と明記されている。見覚えのあるその筆跡は、広足初期版行著述の書体と紛れもなく一致する。例えば、図版Ⅴ『樺島浪風記』および図版Ⅵ『檀園長歌集』の「長崎」ならびに「御」を図版Ⅶ『長崎土産』の同字と比較しても、同一人物の手になることは疑い得ない。さきの『不知火考』に彩色画二面が附載されていることも勘案するに、広足著述の版行には立身屋とともに大和屋等の長崎版画の版元が深く関与していたことが結論付けられよう。<sup>⑥</sup>



図版Ⅳ 国会図書館蔵『長崎土産』所載「観清人戯場作歌」末尾



檀園大人著述目録

加橘加受比良哉

不知火考

舟圖 全二冊 既刊

大國の名を火のついでに、國史考令  
みざるの故に記す世傳の故に書  
古書よみたる考正 古歌よあげ

肥後國舊

地考 全三冊

全三冊 既刊

歷木考

全三冊 近刊

此集編撰異同多し故正し并澤長秀の  
註の誤を正しられたるなり

檜垣家集補註

全一冊 既刊

水江物語

全二冊 既刊

とさくくの物語

全一冊 既刊

うすみのすまひ

全一冊 既刊

檀園歌集

全三冊 近刊 大人の家集ちう

檀園長歌集

全二冊 全 同右

蘭船入津

長歌 全一冊 蘭船の入津(長崎の)一社觀より此長歌

親清人戲場

長歌 全一冊 親清人の戲場(長崎の)一社觀より此長歌

檀園文集

全三冊 全

玉園山花宴記

舟圖 全一冊 春上の花宴を撰訪大空同の御書合もて  
て酒宴やらせりとのことあり

樺島浪風記

全一冊 文政十一年八月西國大風の時樺島に難船あり  
かきつく食せられたりとの事あり

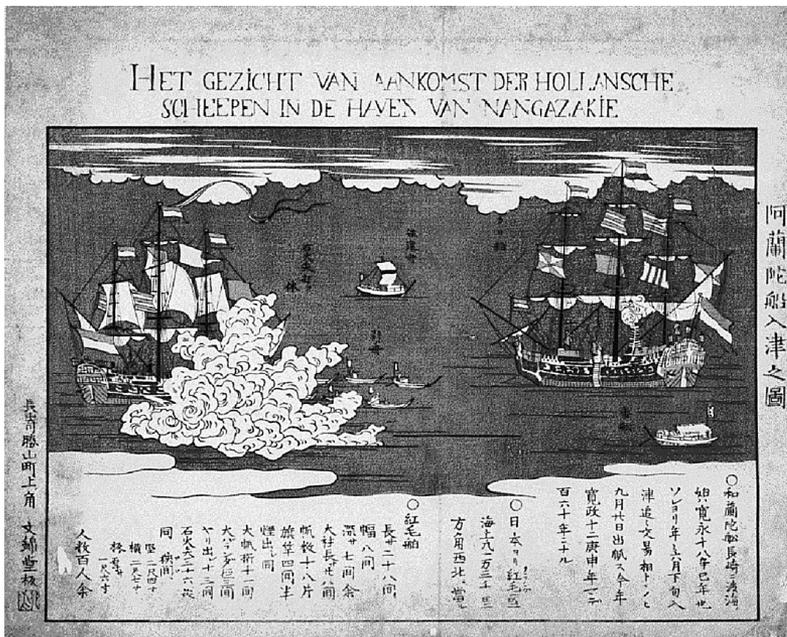
金海山詣記

全一冊 既刊 肥後國八代郡舞鶴に延暦寺あり  
詣られたりとの事あり

るため、おそらく「詠紅毛舶入貢歌一首并短歌」を改題したものであろう。また、十一番目の「親清人戲場長歌」は唐人踊りの模様を詠じた長歌であり、同じ題の歌が『檀園長歌集』に収録されている。そして、十三番目の「玉園山花宴記」は諏訪社後方の玉園山における来舶清人との雅宴の模様を記しており、同題の和文が『檀園文集』に収載されている。つまり、同目録が編まれた時点において、広足歌文集から異国趣味の長歌二首および和文一題を選び、各々別の冊子に仕立てて上木することが企てられていたといえよう。

さらにまた、各書名右の「附図」の文言は、広足歌文に図を附す目論見があったことを物語る。近世後期の長崎において、異国趣味の一枚摺りが数多く上梓され、廉価な長崎土産として人々に愛好されていたことは、永見徳太郎を始めとする先学の論攷に詳しい。図版Ⅸ・Ⅹの一枚摺りと比較して明らかなく、右の「蘭船入津長歌」および「親清人戲場長歌」は、長崎版面に描かれた題材を長歌に詠んでいるといえよう。また、玉園山の花見の宴における清人との交誼のさまが綴られた「玉園山花宴記」に関しても、長崎版面中にごそ同様の主題の絵を見出し得ないものの、打橋竹雲画「長崎名勝図絵」(長崎歴史文化博物館蔵 近世後期写 二冊)には長崎日見峠の桜の下において詩歌管弦の遊びに興じる清人ならびに長崎文人の姿が描かれており、広足の和文と趣向を同じくする。長崎版画

図版IX 国会図書館蔵「阿蘭陀船入津之圖」(寛政十二年刊 一紙)



中島広足と書肆立身屋万兵衛

図版X 長崎歴史文化博物館蔵「唐人蛇踊圖」(近世後期刊 一紙)



二二五

を始めとする長崎の絵画から広足が影響を受けていたことをうかがわせよう。なお、舶来の文物を歌文に表現するに際して、広足が現に絵画作品を念頭に置いていたことは、広足『夢路日記』（文政五年奥書 自筆稿本一冊）の「かくて阿蘭陀舟をいたりて見る。まことにうつし糸にて見つるにもまさり、まねびいはんかたもなく、あやしきさましたり」<sup>⑦</sup>の記述、さらに『檀園長歌集』所載「詠食火鳥歌」の「おこし炭 くふとふ鳥は 遠き世に もちわたりきと 老人の いひつがひつ、 うつしたる かたには見れど おほ、しく」<sup>⑧</sup>の詠歌にうかがい知れる。目下のところ図が附載された広足歌文を見出し得ていないため、如何なる図が添えられていたか不明であるものの、近世後期の長崎における異国趣味の流行に乗じて、舶来の文物が異国情緒漂う広足歌文に表現され、さらに広足歌文に図を附して版行する計画が練られていたことが明らかである。

#### 四 橋加受比良

ところで、右の「檀園大人著述目録」を記した橋加受比良なる人物に関しては、彌富の諸論攷にも言及がなく、広足門人であることを除き詳しい経歴は未詳のままである。しかしながら、広足著述の版行に関与し、種々の策を廻らした人物であることが広足関連資料にうかがい知れる。例えば、拙稿「広足と宣長——『後の歌がた

り』に見られる宣長批判の内実——」<sup>⑨</sup>に指摘した通り、加受比良は『檀園文集』第一集の巻末に近藤光輔宛本居大平書簡および永章宛橋守部書簡を掲載することを企てた人物である。

こは、むかし本居大平翁の近藤光輔翁におくられたるせうそこのおくつかたなり。次なるは、大江戸なる橋守部翁の青木永章翁におくられたる也。わが檀園大人、ひなにすまれて其御名はひろからねど、猶しる人ぞしるとか。此名だゝる翁たちのほめられたることはのむなしからぬを、わがどちにしらせまほしくて、こ、にうつし出つるになむ。 橋のかずひらするす<sup>⑩</sup>

大平ならびに守部が広足の和文を誉め称えていた事実を示すことにより、広足の文集に箔を付ける狙いが加受比良にはあったことがわがせる。当時いまだ三都においてはその名が知られていない広足の歌文集を如何にして諸国に売り弘めるか、画策する加受比良の姿を垣間見せよう。<sup>⑪</sup>

一方、かく大平・守部の書簡を『檀園文集』に掲げることに対して、広足の無二の友である永章は異を唱えていた。

きのふは御文集御もたせ難有存候。さて、昨夜つくつく思ふに、大平・守部の一枚、何分いやに覚えて候。さは、今の世文章かき候もの、君につゞくものなし。大平・守部の文章もしろしめす通りなり。<sup>⑫</sup>

大平・守部書簡が附載された『樞園文集』を目にした永章は、広足に対して言葉を選びつつも書簡の削除を求めている。露骨な自己喧伝ともいえる行為を「何分いやに覚え候」と評した永章の心中が察せられよう。しかしながら、永章の諫めも虚しく両書簡を収録した『樞園文集』が現に出刊されており、広足著述の版行に対する加受比良の影響力のほどが偲ばれる。加受比良とは如何なる人物であったか。

そもそも、右の「樞園大人著述目録」は、広告としての色合いが濃く、書肆の思惑を反映して執筆されたことは疑い得ない。ゆえに、加受比良が立身屋との繋がりが深い人物であることは明白であり、あるいは立身屋当人であったことも想定されよう。そして、先述の『瓊浦集』には立身屋が加受比良であることを暗に示した跡が残されている。同歌集には「立身万平」の名にて立身屋の和歌一首<sup>13</sup>が入集しており、歌人としての立身屋の名乗りが知られる。万兵衛を振り戯れに付けた名であることは想像に難くないが、万平を「かずひら」と読み得ることは注目に値しよう。例えば、近世の名乗辞典の一つ高井蘭山輯・清間斎刪補『新增名乗字引』（安政二年刊 一冊）には「万」を「かず」と訓む例があり、万平を「かずひら」と訓読していた可能性が浮かび上がる。一方、加受比良が立身屋版の広足初期著述の版行に関与していたことは、さきに論じた『佐鳥慶志之

考』本文末尾の「陳亮ひそかに橘のかずひらと相はかりて、さる名をおほせて板にさへゑらしめつる」の記述に明らかである。筑後柳川藩士の武藤陳亮が広足に「歴木」を贈ったことに端を発する同書の版行に際して、陳亮は加受比良に上木の話を持ち掛けており、加受比良が広足著述の版元であったことをうかがわせる。大平・守部書簡を附載して『樞園文集』の権威付けを図ったこともまた、一門人の所為としては行き過ぎた観があるが、広足著述の評判を高めて売り弘めるために版元の立場から講じた策としては当然ともいえよう。さらに、異国趣味の広足歌文に図を附して版行する試みもまた、長崎版画の版元と同じ勝山町に軒を連ね、異国物の浮世絵が大当たりする様を目の当たりにしていた立身屋なればこそその発想であろう。世の流行りに乗じて巧みに広足著述を売り弘める立身屋の書肆としての姿が知られよう。

#### おわりに

以上、立身屋の書肆としての実像に迫りつつ天保年間における広足著述版行の模様を検証してきた。その結果、立身屋と長崎版画の版元との繋がりが浮かび上がり、広足著述の版行には大和屋等が関与していたことを長崎出版史の新たな一齣として示した。また、近世後期の長崎における異国物の長崎版画の盛況を受けて、舶来の文

物が広足歌文に表現され、さらに加受比良こと立身屋により広足著述の主たる作品として喧伝されてゆく有り様を明らかにした。

先学の諸論攷においては、異国趣味の広足歌文の存在のみが殊更に特筆され、通時的な考察が行われてきた。しかしながら、異国趣味の広足著述が成立し売り弘められてゆく過程に立身屋の関与があることは、本稿に論じた通りである。立身屋を始めとして、近世後期長崎文壇の動向を弘く踏まえて、広足歌文に対するさらなる共時的な検証がなされてゆくべきであるといえよう。

注

- ① 『国学院雜誌』第二十八卷第十号、大正十一年十月。
- ② 以下の引用文は、私に濁点・句読点を施した。また、漢字は適宜通行の字体に改めた。
- ③ 『国語国文』第二巻第五・六号、昭和七年五・六月。
- ④ 『大学出版』第五十七号、平成十五年六月。
- ⑤ 『檀園集』を始めとする天保年間上木の広足著述の修訂本において、町名が埋木されている。
- ⑥ 『長崎土産』の奥付には「江戸 石上松五郎 刀」と記されており、江戸の彫り師が『長崎土産』の版行に関与していたことが知られる。信春は江戸の溪斎英泉のもとで浮世絵を学び、また六樹園・芍薬亭編『狂歌長胤集』（文政四年刊 一冊）の挿絵を北浜とともに手掛けた人物である。江戸在住時代の繋がりを活かして、彫り師の松五郎を長崎に呼び寄せたと推定される。広足著述の版行に際しても、江戸を始めとする三

都の彫り師が関与したと思しい。

- ⑦ 引用は、国会図書館蔵本に拠る。
- ⑧ 引用は、諏訪神社蔵本に拠る。
- ⑨ 『近世文芸』第八十一号、平成十七年一月。
- ⑩ 引用は、諏訪神社蔵本に拠る。
- ⑪ 『佐島慶志之考』修訂本巻末附載の本居内遠詠「誦佐島慶志之考作歌」の末には「加受比良書」とあり、同書においても本居内遠の歌が加受比良により示され、広足著述の権威付けが目論まれていたといえよう。
- ⑫ 同書簡の行方が目下知れないため、先掲『中島広足』所載の引用を転載した。
- ⑬ 「湊頭旅泊 立身万平／波まくらうきをかたるもむつましくおなじみなどのよるのともぶね」なる一首が収録されている。
- ⑭ 引用は、諏訪神社蔵本に拠る。

〔附記〕 本稿は、平成二十七年度秋季同志社大学国文学会研究発表会における口頭発表の一部をもとにした。席上御教示下さいました方々に御礼申し上げます。また、平成二十七年度科学研究費補助金若手研究(B)「近世後期から末期にかけての長崎における異文化融合の総合的研究」による研究成果の一部である。